

「教えて米子城」スペシャル・シンポジウム

《隠れたる名城 米子城 ―その価値と魅力に迫る―》

・日 時 平成28年1月23日(土)

13:00~16:30

・場 所 米子市公会堂(大ホール)

●基調講演2

「米子城のここがすごい！―史跡を活かしたまちづくり―」

中井 均 氏(滋賀県立大学人間文化学部教授)

○司会 それでは、次の講演に移ります。

「米子城のここがすごい！―史跡を活かしたまちづくり―」、滋賀県立大学教授、中井均先生の御講演です。

ここで中井先生のプロフィールを簡単ではありますが、御紹介させていただきます。

中井均先生は、財団法人滋賀県文化財保護協会を経て、米原町教育委員会に勤務、退職後、NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長として全国のまちづくりにかかわってきました。長浜市長浜城歴史博物館館長などを歴任し、現在は滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科の教授として、地域遺産などを持続可能な状況で後世に残し、活用するための方法などを研究されています。

それでは、中井先生、よろしくお願いします。(拍手)

○中井氏 改めまして、こんにちは。中井と申します。ただ今過分なご紹介をいただきまして、そんな大した研究をしているわけでは決してなくて、私は小学校5年生のときからお城が大好きで、お城以外にはほとんど興味を示さん子でありまして、親が大変心配をしております、将来立派な人間になれへんぞって言われたんですが、まあそれはそのとおりがなと思ったりしています。

実は私、今年60になったんですが、高校3年の春、山陰の城を見に来たのが、米子城をいちばん最初に見た思い出であります。鳥取、米子、松江、津和野、萩を回って帰った記憶があります。その結果、見事大学に滑ってしまったという、思い出深い城跡であります。

今日の米子城のここがすごいっていう、このテーマっていうかお題は、米子市教育委員会の方から言われたわけですけども、私、米子城っていうのはすごく好きなお城の一つであります。ところが、先ほど佐藤調査官もおっしゃっていましたが、隠れたる名城なんていうのを米子市教育委員会がつけてしまったのですが、全然隠れてないわ

けですよ。私にとっては、こんなが隠れた名城やったら、ほかの城、全部隠れとるやないかというぐらい、実は隠れてない。これはすばらしいお城であります。

その話を今日させていただきたいんですが、まさかこれだけの方がお見えになるとは夢にも思わず、これだけの方が来られてるということが米子市民、あるいは鳥取県民の文化の高さを象徴してるんだろーと思います。私は、そんなに米子の方が米子城に関心あるもんだとは夢にも思わなかったので、自分の話よりも、これだけの方が来られたことに感動してるというか、皆さん、そんなに米子城のことが知りたいんだ、興味があるんだっていうのは大変ありがたいことだと思っています。

私がお城を好きになった時代っていうのは、お城の本なんてほとんどなかったわけですね。1冊か2冊ぐらいしかなかった。ところが、今、どうも世の中はお城ブームだそうであります。例えば彦根城が去年3月27日に5年半ぶりに修理が終わって、私、4月1日に見に行ったんですが、1時間待たされたんですね。今までお城で並んだことないわけですよ。というか、人生で並んだのは子供とディズニーランド行ったときぐらいなんですよ。それがお城で並ばされたっていうのは、こんなにすごい人気あったんやっていうふうに思いました。それから、7月には松江城が国宝になった。私、ちょうど松江市史の編さんをやってる関係で、伺いますと、見学者が1.5倍ぐらいになってるっていうことで、実はすごいブームになってるんですね。

皆さん、お城って何だと思われませんか。何だろうかっていうと、これは軍事的な防御施設なんですね。戦うためにつくられたもの。これはもう本質でありまして、これを抜きにお城っていうのは語れないわけであります。ところが、例えば米子城なんか行きますと、何も残ってないやんって言わはるわけですね。一般の方はお城というと、イコール天守閣やというふうに思ってしまってるんですね。だから、米子城行っても「石垣しか残ってないやないか」、「石垣しか」って言わはるんですが、石垣が残ってるっていうのはすばらしいことなんですよ。

私、もともとはもう少し時代が古い、戦国時代の土づくりの城を一応研究の専門にはしてるんですけども、戦国時代の城なんか行ったら、それこそ何も残ってないって言われるわけですよ、地元の方がね。「あんな行っても何にもないよ」って言われるわけです。ところが行くと、土塁や堀切が見事に残ってる。結局、一般の方のイメージっていうのが姫路城や彦根城の天守閣のイメージがあって、それ以外は何もないというふうに思われてしまっている。しかし米子城は、石垣がほぼ完存してるっていうことでは、この点だけでもすばらしいわけですね。

今日、私のレジュメの資料の22ページですかね、図2をごらんください。図2は、「米子城石垣おんしゅうふくおんねがいえす御修覆御願絵図」っていう、寛文7年、1667年の絵図であります。

これは石垣を修理するためにつくった絵図なんですよ。実はお城にとって何が大事かということです。江戸幕府、徳川幕府は、石垣の修理に対してはこういう修理願を必ず出さすわけですよ。つまり土木のほうが圧倒的に重要やったわけですよ。

これ見てもらいますと、建物がすごく簡素に描いてある。建物のことを「^{きくじ}作事」といいます。それから、石垣や土木のことを「^{ふしん}普請」といいます。お城っていうのは、普請と作事で成り立ってるわけですけども、軍事的な面からいうと、圧倒的にこの普請の方が重要なわけなんですよ。実はこの絵図、ずうっとこの後、使われていくわけですが、これがモデルになるわけですよ。つまり、例えば先ほどの佐藤調査官のところにも同じような絵図がありますが、これは修復するための絵図としてその後ずっと使われていくんですね。だから、幕府にとっては、どこの石垣を直すんだっていうのがいちばん問題になるわけですよ。つまり、今までみんな、建物にしか目が行かなかっただけでも、実は城の本質というのは、近世の城であっても、江戸時代の城であっても、やはり普請の方が重要なわけですね。今日は普請、つまり土木事業の方を見ていきたいわけです。米子城の構造というものをまず探っていこうと思います。

米子城はどこからかっていうと、この絵図が示してるとおり、内堀の中になるわけですね、いわゆる城郭部分になります。よく米子城っていうのは、「^{ひらやまじろ}平山城」か「^{やまじろ}山城」かっていうふうに聞かれる場合があるんですが、私はこう思っています。山の上の部分、つまり本丸のあたり、これは詰めの部分、つまり防御的な空間なわけですね。戦うためにつくられた場所であります。ふだんあんなところには住んでないわけですね。荒尾の殿様が来ても天守に入ることっていうのは恐らくほとんどなかつただろうと思います。

私、彦根に大学があるので、彦根城がすぐ近くなんですが、彦根城にちょくちょく行きますとね、観光客の人が、必ず言わはるわけですよ。「いいね、お殿さんは、毎日こんなところから琵琶湖眺めてすごいな」って。あんなところ絶対住まないですよ。ふだんは、山麓部分の御殿に住んでいます。彦根城も同じなんですよ。山の上に城郭部分があって、山麓部分に表御殿っていうのがあります。米子城も、山の上の詰め部分と、それから山麓の御殿空間、つまり二の丸の居住空間があります。こういうふうに分離してるっていうのは戦国時代のあり方なんですよ。近世になると山からほとんど城が下りてしまうので、本丸の中に御殿空間を設けたりします。ところが、ここはまだ、そういう意味では、戦う意識が非常に強い時代に石垣の城になったということを示していると思います。私は山城ではないかなというふうに思ってるわけです。これ絵図に山城って書いてくれてるのが残ってたらいいんですが、残念ながら米子ではそれが見当たらないので何とも言えないんですが、私はこの山上と山下の分離型っていうのは山城であっていいだろうというふうに思っています。

さて、その縄張り、要するにお城の構成なんですけれども、絵図と、それから測量によってさまざまなことがわかってまいりました。実は私、この講演の前、1月9日に米子市の教育委員会の方とみっちり1日かけて米子の城の中を歩かせていただきました。1日かけても足りないぐらいものすごく楽しいんですね。私は、さっき言ったように、小学校のときからお城が好きですから、城に行くとすごく気分がハイになる。病気でも治っちゃうぐらいなんですけどね。昼食も忘れて、ものすごく楽しかった。お昼ご飯食べたの2時過ぎやったんですよ。全然おなかすかなかった。すっごくおもしろいお城なんですよ。

ゆっくり歩いて思ったのは、11番の絵図をちょっと映していただけますでしょうか。これ米子城の絵図でありますけれども、これを見ますと…ここが^{おおてもん}大手門です。それから^{からめてもん}搦手門っていうのがあります。大手っていうのは正面、搦手っていうのは裏門で、みんな大手門が正面だと思ってるんですが、お城の大手って、時代によって変わるんですよ。私は、米子のお城っていうのは、幾つかルートがあったんじゃないかと思っています。一つは、まさにここで大手と書いてあるとおり、この大手門からあの枡形という大きなところへ入って、ここですね、ここに入って、そして二の丸に上がっていくっていうのがルートだろうと。もう一つは、実は搦手から上がって行きまして、^{おんうらなかごもん}御裏中御門というのを上って行くっていうルートもある。

それはなぜわかったのかというと、例えば今日のシンポジウム資料の中にいいのがありました。城下町の絵図を見ていただくとわかると思います。資料32ページの「米子市街地図」っていうのを見ていただきますと、外堀の外側、まあ、外堀の内側でもいいですが、今言いました搦手に対する直線道路と大手から外へ出ていく直線道路の方位がずれてる。ちょっと開いてるんですね。普通の城下町に行きますと、碁盤の目状にちゃんと町家がつくられてるんですが、どうもここは、ずれてるんですね。そのずれは何かというと、恐らく時代のずれだと思います。もともとは、恐らくこの裏御門の方が古い時代の町筋を示してるんじゃないか。大手門の方は新しい時代、後でまたお話ししますが、^{きつかわ}吉川氏以後、中村とかが入ってきたときに整備された可能性があるんじゃないか。つまり、古い段階では裏御門の方が大手であっても全くおかしくない。

それからもう一つ、やっぱり魅力は、この中海に面した^{うみじろ}海城であるっていうことですね。この深浦の方から上がって行って、飯山との間からこう上がっていくっていうルートも想定できるわけがあります。つまり、幾つかの大手が考えられるっていうことなんですね。今までのように、単一なものとは決して考えない方がいいのではないかというふうに思っています。

もう一つ、この米子城のお城の縄張りで一番特徴的なものは何か。それはこの大手、

搦手の門を見てください。中へ入って、この大手の場合は右に折れ曲がります。搦手の場合は左に折れ曲がります。普通、皆さん姫路城とか彦根城行っていただきますと、入り口にも門があるはずですよ。これ枡形っていいですよ。米子はね、入り口に門がないんですよ。中だけにしか門をつくっていない。それは、この枡形のところも一緒ですね。枡形はすっと入って、二重^{やぐら}櫓の下だけに門がある。つまり、江戸時代に成立する内枡形という、正面に門があって、そこ入ると右か左に折れるという構造ではなくって、入り口が開いてるんですよ。門は1つしかない。中へ入ったところの櫓門しかない。これは米子城の大きな特徴であります。この構造は、どこに求めることができるかという、実は、豊臣時代の大阪城、ちょっと時代が古いですね。豊臣大阪城はいちばん最初の門がなくって、入って右折れ、左折れして、櫓門があるという構造になります。同じように、豊臣秀吉が造った肥前名護屋城^{ひぜん なごやしゅう}なんかは発掘でそれが明らかになっています。入り口部分には門がないわけですよ。開口している、オープンになっている。中だけに門がある。これが関ヶ原の合戦の後になりますと、ここに高麗門という門がつくようになります。つまり、門が2つになる。じゃあこれは関ヶ原以前のものなのかという、決してそうではなくって、筑前の黒田氏の福岡城や、あるいは伊予の宇和島城なんかは、関ヶ原の合戦の後なんです、外側に門がない。つまり、どうも豊臣系列の作り方をそのまま踏襲しているわけですね。私は米子も、恐らくそういう豊臣の城づくりの知識を持っていた縄張りをつくる人たち、つまり設計者がいて、この一の門というか、入り口に門をつくらないタイプのものをつくったのではないかなというふうに思っています。これが私は、米子城のいちばんの特徴ではないかというふうに思っています。

それからもう一つは、まさに今残ってる、皆さんが米子城に行かれると登り口にある、この枡形というやつですね。これが、すごい違和感があるわけですよ。何か取ってつけたみたいなんです。恐らくこれ後づけではないかなと思ってます。もともとの縄張りにはなかったのではないかと思います。

これと同じようなものが、実はこの近くのお城にもあります。それは松江城の大手の馬溜^{うまだまり}というところですね。あそこにも同じやつがあるんですよ。それが慶長8年以降でありますから、関ヶ原の合戦が終わってちょっとしてからつくられた。

私、もともと、ここに枡形っていうのはなくて、二の丸の塁線っていうのは枡形の手前で終わってたと思います。それが関ヶ原の合戦の後に馬溜としてつくられたのが、この大手の枡形ではないかなというふうに思っています。このあたりは、石垣をうまく編年していけば、時代がもう少し明らかになってくるのではないかなというふうに思っています。

それからもう一つは、米子城の最大の特徴でありますけれども、天守と四重櫓って

いますか、2つの天守があったってことです。従来四重櫓が先行して吉川広家の段階につくられて、その後、中村氏が入ってきて、現在の大天守のところに天守をつくったって言うふうに言われているんですが、私はやっぱり、もともとここに天守台があってもおかしくないんじゃないかと思います。四重櫓っていうのは、本丸の隅っこに突き出たようにつくられているので、このあたりは後ほど金澤先生なんかは建築の方からも分析してくださると思うんですが、この前後関係っていうのは、考えていけばおもしろいのではないかなというふうに思っています。

問題は、1月9日に寄せていただいたときに、この絵図を使いながら教育委員会の方に説明を受けた水手御門みずのてごもんの下、ここの発掘で今、石垣が出てきている。これ実は、絵図に石垣が白く描いてあるんですよ。もう一つは、このあたりにある八幡台はちまんたいというところですね、ここも発掘している。八幡台は既に絵図に郭も描いていない。もう一つ白抜きしろわの石垣があって、それは飯山の部分であります。この絵図が描かれたのが1739年に成立したと言われてますから、つまり、18世紀にはもう既にこの水手御門の下の郭は石垣だけになっていて、建物が一切描かれていない。飯山ももう使っていないということがわかるわけですね。だから、やや古いものではないかと思います。さらに、ここで出てきた八幡台はもっと古いんだろうということが考えられるわけですね。米子城といっても時代によって使われている部分と使われていない部分がこうして明らかになってくるということでもあります。

それで、後でもまたお話をするかもしれませんが、この水手御門の下の石垣は崩されてしまってるわけですね。ちょっとその写真を見せていただいてもいいですか。15番ですね。これがその水手御門の下の郭で、今、発掘調査していただいている石垣なんですね。すごく隙間が空いていて、一見古いタイプに見えますが、この石に注目していただきますと、ここに何か歯形みたいなやつがあります。これ矢穴やなといいます。石を割った痕跡なんですね。これが出現してくるのは大体慶長5年前後、つまり、関ヶ原前後ぐらいから出てくる石の割り方であります。これが若干であります、水手御門の下の郭に使われている。おもしろいことに、上の郭には石垣がないんですよ。下の方にしかない。恐らく人為的に潰されてるんじゃないか。城を潰すのを「城割り」とか、「破城はじょう」と呼んでいますけれども、これはどうも自然になくなったのではなくって、人為的に上を潰している。はなからもう使わないでおこうというふうなことがこの状況から見えるんじゃないかなというふうに思っています。この水手御門なんかは絵図やこうした発掘調査で新たにわかってきたんです。

それから、もう一度絵図を見せていただけますでしょうか。もう一つはね、この内堀、こういうぐあいに入ってる。ここがおもしろいんですね。今はもう見ることができない

わけですけれども、恐らく中海から直接内堀に入って来れるわけですが、このあたりに船溜りがあったのではないか。やっぱりすぐに堀に入られますから、敵が入ってくるのを防ぐために、こんな意地悪な石の取っ手をいっぱいつけてるわけですよ。このあたりの海城としてのあり方っていうのも、絵図からではありますけれども、見るができます。

あるいは従来、飯山が古くて、この湊山の部分がその後につくられたっていうふうに言われてるんですけども、この内堀の状況を見ると、本来ここ、深浦のところで遮断してもよかったのに、飯山を取り込んでるといのは、やっぱりこの山、敵に取られると大変まずいので、わざわざ内堀を飯山の外側に向けて掘削したんだろうというふうを考えられます。私は同時期につくられたのではないかなというふうに考えています。

さてもう一つ、今回見学させていただいていちばん、感動というかね、これはすごいなと思ったのは、この部分であります。内膳丸とそれから遠見櫓とおみやぐらの間、斜めに石垣が描いてあります。これ私の資料の図2を見ていただいてもよくわかるんですけども、図2の本丸から内膳丸に向けて、要するに一番高いところから右の方に向けて、斜めに土塀が描いてあります。わかりますかね。この斜めの土塀は、この後ずっとこの石垣修理願の絵図には描かれています。お城で斜めに石垣をつくるっていうことは、ほとんどないわけですよ。山城の場合は階段状に、郭を本丸、二の丸、三の丸というふうにつくっていきますから石垣も階段状になります。それを階段にせずに、斜めに真っすぐ石垣を落とすっていうのは、ほとんど考えられないっていうか、事例がないわけです。これを登り石垣といいます。石垣が登ってるわけですね。斜めに登ってるわけです。

これは、日本の城の中では非常に特徴的な石垣でありまして、文禄・慶長の役、つまり豊臣秀吉が朝鮮出兵をしたときに、豊臣秀吉軍が朝鮮半島の南岸、今の釜山フサンとか蔚山ウルサンのあたりに「倭城」という日本式の城を築きます。その城は、港の後ろにある山に必ずつくります。水軍、要するに海軍を守るために港に向けて斜めに石垣を落としてるわけですね。縦に石垣を落としている。これを登り石垣と呼んでいます。文禄・慶長の役の倭城ではたくさん使われているんですけども、それが文禄・慶長の役の後、日本の城にも幾つか使われてるわけですね。まさに倭城の影響を受け継いで。海から見ていただきますと、本丸から斜めに下がってくる登り石垣、そして内膳丸の石垣が一体化して見えるっていうことなんです。

写真で少しその事例を見ていただきたいと思います。まずは、3番行きましょうか。これは文禄・慶長の役のときに加藤清正が築城した西生浦倭城ソセンボという、釜山の東北の方にあるお城です。このあたりに港があります。山の上からこれずうっと石垣が下りてきているんですね。この登り石垣がまず文禄・慶長の役ぐらいに日本の城として登場して

まいります。

じゃあ、次、伊予の松山城を見ましようか。伊予の松山城っていうのは加藤嘉明という大名がつくったお城であります、慶長以後築城された。加藤嘉明かとうよしあきはもちろん文禄・慶長の役に参戦してるわけですけども、これがずっと下に落ちていく、本丸から二の丸におりていく登り石垣というやつですね。

じゃあ次、お願いします。これは洲本城すもとです。洲本は脇坂安治わきさかやすはるという大名が築いた城であります。この脇坂安治も文禄・慶長の役に行ってるわけですが、これが本丸の石垣です。そこからまさにこれ石墨いしずみですね、中にまで石を入れて、幅が2メートルぐらいの石墨をずっと下の館まで築いてるわけであります。

はい、次、10番お願いします。彦根城の登り石垣ですね。これは彦根城の本丸からずうっと下のほうに向かって石墨が下りていってる状態ですね。外側にはちゃんとたてぼり堅堀もつくっているわけですね。

じゃあ、「御城内御絵図おんじょうないおんえず」という絵図を少し見せてください。これが彦根城の城郭部分を描いた絵図なんですけど、登り石垣を5本つくってるんですよ。ここでちょっと覚えておいてほしいのは、本丸からここに出ている登り石垣と、鐘の丸からここに出ている登り石垣がこの表御殿を両手で抱えるように守っているということですね。わかりますかね。これで一体化しようとしているわけです。

そうすると、米子城はどうなのかっていうと、もう一度米子城の絵図を出していただきますと非常にわかりやすいですね。実は米子城の場合、海からの景観というのもすばらしいんですが、ここが二の丸、いわゆる御殿のあった場所です。そこに対してこういうぐあいに登り石垣が出てきている。それから、最近の詳細な測量と分布調査でここに堅堀が見つかっています。つまり、ここも登り石垣と堅堀で、両手でもって山上部分と山下部分を一体化して守ろうというような構造であったというのが徐々にわかりつつあります。

この登り石垣の大変おもしろいのは、時代が限定できるっていうことです。文禄・慶長の役以前の日本の城にはないわけですよ。文禄・慶長の役で、朝鮮半島でつくった倭城の影響を受けてつくっている、つまり、登り石垣とそれから二の丸が一体化するというのは、文禄・慶長の役の後ではないかということですね。私は、これは吉川広家が文禄の役に参加した後につくったのではないかなというふうに思っています。

さらにそれは、例えば吉川広家が、米子とともに、西伯耆を、伯耆の国を賜ったときに、がつさんと だじょう月山富田城に入ります。月山富田城では発掘調査の結果、朝鮮半島で焼いた滴水瓦てきすいがわらという瓦が出土しています。ですから、月山富田城も文禄・慶長の役の後に吉川広家によって修築されてる可能性が非常に大きいわけです。今までは、吉川広家はまず月山富

田に入ったけれども、山の中で非常に政治がしにくいということで、伯耆の中心を米子に持って来たって言うふうに言われてるんですが、私は、決して月山を放棄したわけではなくって、両方ともやっぱり意識して改修したんだというのが見えてくるのではないかなというのが、こういった縄張りからわかってくるんだろうというふうに思います。

もう一つ、今度は米子城の見どころ。ここがすごいっていうのは、やっぱり天守台ですよ。天守台の写真を見せていただきたいんですが、17、18といきましょうか。これは、米子城の天守台であります。よく見ていただきますと、築石部分、つまり中心の方にはほとんど加工した石がないわけですね。ところが、このあたりには矢穴がある。さっき言ったように、割った石が使われています。こちらもそうなんですね。

もう1枚お願いします。これ、ここに矢穴がきれいにできていますね。このあたりにもある、このあたりにもあります。つまり、隅の部分だけに矢穴を使った石を入れていません。築石の部分には全く入ってない。

全体の写真をもう一度見せてもらえますかね。ええ、これですね。これをまず見ていただきますと、これは築石の部分です。天守台の下の方です。やっぱり全く矢穴がないわけですね。粗割りか自然の石を積んでいる。まずこれを見ておいてください。

じゃあ、これの年代、いつ頃かっていうことで、次に、やまとこおりやまじょう大和郡山城の石垣をちょっと見てみたいと思いますね。これ大和郡山城の石垣です。見事に隅だけに加工した石を積んでいます。真ん中は全く自然の石なんですね。ほとんど矢穴が入らない。だけど、隅の石は矢穴が入っています。

もう1枚お願いします。これがそうですね、このあたりに矢穴が入ってます。これもそうですね。このあたりにも入ってる。ここも入ってる。だけど、築石の部分には全くない。この大和郡山城の天守台が、大体、文禄ぐらい、文禄年間だと言われています。だから、文禄から慶長という1590年代ぐらいにこういうタイプの石垣があるんじゃないかと思います。

もう1枚、これすばらしいですね。大和郡山のその天守台であります。これは今まで木が繁茂していて全く見えなかったんですが、現在は、修理するので木を切ってくれています。

もう1枚、近江八幡の石垣の写真もちょっと見せていただけますかね。これ近江八幡城の天守台だろうと言われている本丸の隅の石垣ですが、やっぱり隅の部分だけが矢穴が入ってしまっていて、築石の部分はこんなにすき間が空いてるような石垣なんですね。これも天正13年と言われていますけれども、文禄年間に修理した可能性が非常に高い。こうして見てくると、米子城の大天守の天守台は、文禄から慶長ぐらいの石垣ではないか。吉川広家がつくったと考えるもいいのではないかっていうふうに私は今、思ってい

ます。

そこでいちばん大事なことは、これから米子城を研究していく上で、現在米子城に残されている石垣を幾つか分類していく必要があるだろうということです。一つは、天正19年に吉川広家が初めてこの米子を築城したときの石垣であります。これは恐らく、飯山や八幡台の石垣ではないかと私は思ってるんですね。

次に八幡台の石垣を見せていただけますかね。23番ですね。これも現在、発掘調査をされていましてね、八幡台というところから出てきた石垣なんですよ。すき間がこのように空いている、それから石は全く矢穴を入れていない、自然石、野面で積んでる、これがちょうどその八幡台というところから出てきた石垣であります。

それから、飯山をお願いします。これは飯山の石垣なんですけれども、やっぱりほぼ自然石で積んでいる。これが今のところ、米子ではいちばん古い石垣ではないか。これが天正19年ではないかなというふうに思っています。

それからもう一つは、慶長5年直前、実はここがいちばんおもしろいんだろうと思ってる場所なんですけれども、慶長5年直前に恐らく吉川広家が、今の天守台やあるいは登り石垣のあたりをつくったのではないかと。登り石垣の石垣、見えますかね。これもちょっと古そうなんですけれども、これが私は文禄の役に参加した後の吉川広家のつくった石垣ではないかっていうふうに思っています。

慶長5年直前ぐらいに、実は、吉川広家が毛利領の東端のあたりのお城、さっき言いました月山富田、それから米子、それから備中との国境の、これは岡山総社市になるんですけれども鬼ノ身城きのみじょうというあたり、つまり、毛利の一番東端が、関ヶ原合戦が近づいてきて世の中の軍事的緊張がすごく高まって、城の修築をものすごくする時期になります。恐らくこの段階で、吉川広家による米子の修築っていうのがあったんだろうと思っています。

そしてその後、吉川自体が関ヶ原の合戦で敗れて、毛利氏が防長2か国に減封された段階で、恐らく城を潰したのではないか。それが水手御門の下の郭に見られる城割りではないかなというふうに思っています。その後、関ヶ原合戦から元和までの間、中村一忠なかむらかず、それから加藤貞泰かとうさだやす、このあたりの大名たちによる修築、そして寛永の石垣、池田光政いけだみつまさが入ったときのその支城として池田由之いけだよしゆきなんかがいるわけですね。もう一つは、江戸時代の石垣、荒尾氏による修理、そして最後は、幕末、嘉永5年に四重櫓の櫓台が修理された。

恐らくもっと細分できるんだろうと思うんですけれども、まず一つの時代では決してないということです。米子城にはこれだけの時代の石垣が詰まってるわけですね。その正しい時代をこれから当てはめていってあげるっていう作業が大事だろうと思います。

そうなりますとね、「何も残ってないやん」と違って、天正時代の石垣はこうですよ、あるいは慶長時代の石垣はこうですよっていう説明ができるんじゃないか。一つのお城の跡でさまざまな時代の石垣を見てもらうことが可能になっていくんだろなというふうに思っています。

それからもう一つ、非常に大きいところで重要なんですけども、どうも毛利氏は、文禄・慶長の役にかかわって、お城を海の方へ、海の方へ持ってこようとするわけですね。それは広島築城自体がそうですよね。毛利氏の本城は安芸郡山城（吉田郡山城）^{よしだこおりやまじょう}という山の中にありました。それが天正17年に広島に移ります。太田川のデルタのところなんですよ。それから小早川隆景^{こばやかわたかかげ}は、本郷にあった新高山から三原に移ってまいります。広島の三原に移ってくる。同じように、実は吉川広家は月山富田から米子に移ってくる。これ、全部海を目指してるわけですよ。それは何を意識しているかということ、秀吉の朝鮮出兵に対して海辺に城をつくっていくということではないかっていうふうに思っています。

決して月山富田が山の中であつたからというのではなくって、その時代の日本が直面した総力戦、これは決して毛利領だけの話ではありません。土佐の長宗我部^{ちようそかべ}も、岡豊城^{おこうじょう}から浦戸城^{うらどじょう}というぐあいに海に出ていきます。あるいは肥後の小西行長^{こにしゆきなが}も、麦島城^{むぎしまじょう}という、八代湾に城をつくっていく。みんな海に出ていくっていう、これは時代の要請だったんだろうというふうに考えると、すごく米子が理解できるんじゃないかなというふうに、私は思っています。

最後、残された時間、終わりにということなんですが、米子城のすごさ、これはもう、今、お話で少しわかっていただいたと思いますが、石垣だけですごいんですよ。だから今、石垣だけの但馬竹田城は、天空の城っていうことで、年間70万人が行くようになった。石垣しかないわけですよ。私の女房なんかに言わすと、昔、若い頃連れていったんですけど、「何であんなところに人が行くん」っていうぐらいね。昔は上まで車で行けたんですよ。今は数キロ歩いて行かないといけない。だけどみんな見に行く。それは魅力があるからなんですよ。

あの但馬竹田城が「天空の城」ならば、米子城は「海を望む天空の城」なんですよ。海からの景観っていうのをやっぱり大事にしたい。だけど、そのすごさを阻むものっていうのは、やっぱり、少し樹木が繁茂していること。昭和50年代に天守台付近は少し整備されたわけですが、山の中の全体的なものとしては、やはりちょっと散髪をしてあげたらいいんじゃないか。全部切れっていうことでは決してないですよ。これは明治以降の城山の持つてる自然っていうのも大事でありますから、どの木を切ればいいのかっていうようなことを考えて、そういう整備をしていただけるとありがたいな

と思います。

私は今、彦根城でその樹木伐採委員というのをやってるんですが、国宝の天守閣まで見えなくなってきたわけですよ、だから、ちょっと切りましょうっていうことでね。切った木っていうのは、ほとんどが昭和20年代以降に植えた木であります。そんなに古い木を切ろうということではないわけですね。

それをしていただくと、城下から見上げた壮大さ、最後に二の丸の石垣の写真、見せてもらえますかね。これですね、22番。これ、二の丸の高石垣なんですけれどもね、これも1月9日に撮ったんですが、ちょっと雑草とかがあるんですが、これ刈ってやって石垣の面が出てくると、山麓にこれだけの壮大な石垣があって、山の上にも山上部分の詰めめの壮大な石垣があるって、まさにいちばん最初に申しあげました詰めと山麓とのね、居館部分と防御空間の石垣のすごさっていうのがね、上と下、両方が見える、体感できるんだらうと。天守台から見る中海っていうのもものすごくいい景色なんですけれども、今度は下から見上げたときの二の丸、あるいは山上の石垣のね、壮大さっていうのをやっぱり見えるようにしていきたいなというふうに思います。

私は幾つかの城跡のそういう整備委員をやってるんですが、結構整備って息が長いんですよ。平成30年とか、まあ平成30年はもう近いな。平成40年とか、50年ぐらいにこういう整備しますっていうような長期計画があるんですが、私自身が今、望んでるといふか楽しみにしたいのは、まさに米子城で下の石垣と上の石垣が、私が生きている間に見れたら、こんなにうれしいことはないわけでありまして。ぜひともそういう壮大さを、これから整備の中で表わしていただけるとありがたいなというふうに思っています。そういう意味では、今後の整備あるいは活用に大いに期待をしたい。

それから、やっぱり城跡は市民に愛される城跡であってほしい。そして城跡のある誇りを町に持っていただけたらいいなというふうに思っています。すごくたくさん市の町村がある中で城跡を持っている、もちろん戦国時代の城跡を入れると日本には3万から4万の城跡があると言われてますが、近世の、つまり江戸時代のお城っていうと200もないわけですよ。江戸300藩っていうけれども、300藩のうち百数十藩は、城を持ってない藩やったわけですよ。無城主大名なんですね。城が持てる大名っていうのは、200ほどしかない。それだけしかないんです。しかも、それがほぼ完存している。まさに誇りに思ってほしいっていうことです。こんなところに育ったっていう自慢、あるいは自信につなげていったらいいなというふうに思っています。

それから、最後の最後になりますが、昭和46年に佐々木謙、一雄さんという方が、『伯耆米子城』っていう本を作られました。私、16歳のとき直接ご本人に手紙を出して、本を欲しいっていうことで売っていただいたんですけれどもね。あの当時、一つの

城で1冊の本が出せたところなんて日本中ほとんどないわけですよ。ほとんど日本の名城とかね、しかも、それは写真集みたいなもんですよ。その中であって、私は恐らく先駆的な書籍だろうと思っています。その後、すごい研究が進んで、今、教育委員会も発掘や測量調査をやっています。ぜひそれに続く『伯耆米子城』を。私もちょっと書かせていただけたらうれしいんですが、そういう本が出せたらすばらしいなというふうに思っています。

ということで、私が愛してやまない米子城の、すばらしさっていいですか、隠れてない名城のよさってというのが少しでも皆さんと共有できたらありがたいなというふうに思います。

たいへんざつぱく雑駁な話で申しわけなかったですけども、時間になりましたので、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)